

あなたの生活に 文学を

阿部 公彦

マジックリアリズムという用語をご存じでしょうか。一種の表現技法。すごく単純化して言うと洗練された「口から出まかせ」調です。今月の石井遊佳さんの「象牛」(新潮10月号)はこれを上手に使っている。

すく思い浮かぶのは、作者の石井さんが在籍した東京大学の文学部です。主人公の女性(これも石井さんと似ていますが)「インド学を研究した」という。実は「インド」は東大の秘境とされる文学部でも、秘境中の秘境。新入生が進学先に悩むと「まあ、いざとなったら印哲(インド哲学専攻)に行きな。あはは」と言ったりするところ。冒頭から、象なのか牛なのかわからない「象牛」という変てこな生き物が出てきます。その後も混沌としたインド事情やあやしい伝承、うわさが続く。が、やがてプロットが見えてきます。トラウマだらけの主人公が、何と「大インド学」のプリアントな准教授と性関係を持つ。

石田千さんの「鳥居」(「文学界」10月号)は対照的に熟年の風情。でも、語り手の突っ張りや頑固さは「象牛」よりも強い。句読点があるのかないのかわからない源氏物語みたいな連続感。まさに石田節。古風なほどこねちこい情念が祭りばやしに乗せて語られます。死期を前にした元彼の思



絵・片山高志

洗練された「出まかせ」調 快感

い出。痛ましい妊娠体験。そんなメインプロットの陰で精彩を放つのが「氣を抜くと、どこを見てもなにをしても、死んだひとにしのびこまれてしまふ」と述懐する語り手の繊細さ。でも、そこには強烈な自我を一生懸命抑えこむ意志の力も。だからなのか、ときに意地悪な「目」がアクセントになります。電車で居合わせた若いカッブル。女の子は「…ホットパンツ、Tシャツとチャネルのバッグ。素足の先端に塗られた深紅のペディキュア。意気込みがかわいい」。やがてその子が読書を始めると「本を読むひとは、放電しなくて安心する」。

石井遊佳「象牛」

石田千さんの作品ではいつも、語り手がなかなか「私は」とは言わない。言葉を口にすることにすら四苦八苦している。この発語のためらいはいったい何なのか。そこには自分も他人もない、ゆるゆるした未分化の「我」の世界が見えているのかもしれない。この作品がありふれた「高

強烈な自我 抑えこむ意志の力

石田千「鳥居」
「動物」に終わらないのは、大事な場面での一言が効くから。目もね、ほら、生ものだから「目もね、ほら、生ものだから」という冒頭の医者。二世帯での同居を決めた夫の「勘違い親孝行」をなじる妻の「(親は)あんなといるのが嫌だったのよ。富雄が数十年ぶりに関係する女性との「なんだかびつたりね。場面」ことに「ひと言」が威力を発揮します。作品最後の「解放」は、もうひとひねりあってもいい気がしましたが、地の文もよけいな飾りがなく、富雄の世界の霞がかかった感じが慎重に描ききられていました。村上春樹さんの「新文学賞辞退」も話題でした。執筆に専念したいから、とのこと。あらためて文学と生活の関係を考えたいと思います。作家にとって執筆は仕事ですが、長い期間にわたる作業であり、生活の一部。人生のリズムとも共鳴します。文章は呼吸であり生理であり運動。自らの抱える内在的なリズムに耳を澄ませることなしに執筆はできません。「ちよつと静かにして」と作家は言いたくなるのでしょうか。「自分の心臓の音が聞こえないから」と。私たち読者は、そういうプロセスをへて書かれた文章を読む。こちらも相対耳を澄ませないといけない。おかげで自分の心臓の音まで聞こえてしまふのかもしれない。(英米文学者)

象徴のうた

平成という時代

永田 和宏 27

平成14(2002)年12月24日、誕生日の翌日、天皇陛下は前立腺がん検査のため宮内庁病院に入院し、前立腺の一部を採取する手術を受けられた。前立腺がんのマーカであるPSA値が上がってきたためである。

昭和三十九年(1964)の昭和天皇崩御の際には「十二指腸腸乳頭周囲腫瘍」の病名は亡くなったあとになって初めて発表されたが、がんの事実は昭和天皇本人にも知られなかった。毎日のようにメディアで発表された大量下血、大量輸血の報道は、国民に必

要以上の不安を与えることになったばかりでなく、いくら公人といえども、個人の尊厳はどうなっているのかと、ある種痛ましい思いで受け止めていた国民は多かったはずだ。

国会始の翌日に入院

国民からの祈りに感謝

入院の我を氣遣ひ訪ひくれし

思ひうれしく記帳簿を見る

平成15(2003)年 天皇

手術のための入院は1月16日。国会始の翌日である。医師の強い勧めで元旦の四方拝などは取りやめたが、2日の一般参賀、10日の講書始に15日の国会始など、1月前半は皇室にとってもっとも多忙な日々である。それらをすべて終えてからの入院手術であったこと、公務に対する陛下の強い意志を感じる事ができる。特に、国会始は、新年にあたって国民と皇室がもっとも親しく触れ合うことのできる場であり、その直後を選ばれたこの意味は大きい。「なるべく公務に差し障りのないように」というのが陛下の要望であったという。これとは較ぶべくもないが、私自身も先日初期の肺がん手術を受けた。これが米国の生命科学関係の学会から帰国した翌日の入院、手術ということにならざるを得なかった。そんな私には「国民のため」を常に最優先で考えられる陛下の決定が、おのずから心に沁むのである。

18日夜、金沢医務主管と、垣添忠生国立がんセンター総長、東大泌尿器科の北村唯一教授ら手術担当医師たちが記者会見を行い、前立腺全摘出、および両側閉鎖リンパ節摘出を行った手術が3時間40分をかけて無事、成功裏に終わったと報告した。前年12月の前立腺がんの報道を

受け、皇居には陛下の快癒を祈る記帳簿が設けられた。それはすぐに全国に広がり、多くの記帳簿に人の列ができた。そんな総数5万1601人も記帳簿を病床でご覧になったのだろうか。そのとき詠まれたのが、掲出の御製である。わざわざ記帳簿にまで足を運んでくれたこと、私の病状を心配してくれたいという思いを込めて「訪ひくれし思ひ」をこそうれしく思うという歌である。陛下は手術の前日、17日には阪神淡路大震災の犠牲者のために、皇后さまと病室で黙禱をされたという。国民のために祈る天皇と、天皇のために国民を祈る。ここには互いに祈ることを通じてつながる天皇と国民という関係が見えてくる。天皇陛下の行為の基本には、国民のために「祈る」という行為があるが、国民もまた自分のために祈ってくれているということが、殊のほか、うれしく感じられたのだろう。(歌人・細胞生物学者) <月曜日に掲載します>



阿部 公彦

マジックリアリズムという用語をご存じでしょうか。一種の表現技法。すごく単純化して言うと洗練された「口から出まかせ」調です。今月の石井遊佳さんの「象牛」(新潮10月号)はこれを上手に使っている。

舞台は「丁大」とのこと。すく思い浮かぶのは、作者の石井さんが在籍した東京大学の文学部です。主人公の女性(これも石井さんと似ていますが)「インド学」を研究したという。実は「インド」は、東大の秘境とされる文学部でも、秘境中の秘境。新入生が進学先に悩むと「まあ、いざとなったら印哲(インド哲学専攻)に行くさ。あはは」と言ったりするところから。

冒頭から、象なのか牛なのかかわからない「象牛」という変てこな生き物が出てきま

石井 遊佳 「口から出まかせ」調

石田 千 源氏物語的な連続感

す。その後も混沌としたインド事情やあやしい伝承、うわさが続く。が、やがてプロットが見えてきます。トラウマだらけの主人公が、何と丁大・インド学のブリアントな准教授と性関係を持つ。これ、どれくらい「出まかせ」？石井さんも東大でインド哲学仏教学研究室に所属されたわけだし、細部が緻密でつい「誰これ?」「まじっ」と間違えて身を乗り出しそうになる。

◇意地悪な「目」

石田千さんの「鳥居」(文芸春秋10月号)は対照的に熟

いやあ、悪質だなあ、と思いきや、描写には妙にロマンチックなデキト〜さ。「男が広大な夜を背負って私を抱きかかえよう。何と丁大。どいまで真面目かわからないの」「そうか、なるほどインド的だ」とうっかり足をとられてしまう。すごい快感です。

◇ひと言に威力

紗倉まなさんの「春、死なな」(「群像」10月号)は流石の効いた作品です。ポイントはずいぶん。主人公は遺言をどうにも読めない。加齢に伴う体の不調や精神の不安定、敷地内に住む息子夫婦との軋轢が描かれます。

この作品がありふれた「高齢者物」に終わらないのは、大事な場面での一言が効くから。「目もね、ほら、生ものだから」という冒頭の医者の「勘違い親孝行」をなじる妻の「(親は)あなたといるのが嫌だったのよ」。富豪が数十年ぶりに関係する女性との「なんだかびつたりね」。場面ごとに「ひと言」が威力を發揮します。(英米文学者(月1回掲載します))



絵・片山高志



平山郁夫さん

平山郁夫さん未公開作

千葉・柏 最初期など10点確認

戦後を代表する日本画家、平山郁夫さん(1913〜2009年)の未公開作品10点を確認した。千葉・柏で企画展を開催し、市内で企画展を開催し、市教委による「平山さん生涯のテーマとしたシルクロードを描いた作品

平山郁夫さんの未公開作品の一つ、サマルカンドを描いた「シルク・ロードの遺跡」(柏市教育委員会提供)



をパステルで描いた「シルク・ロードの遺跡」、66年9月に描いた「トルコベリシラマ村の女」など。

平山郁夫シルクロード美術館の平山東子副館長は、サマルカンドの作品に着目し「鮮やかな色が印象的。よく描き込まれていて、ライフワークにつながるテーマに出合ったときの情熱が伝わる」と話した。ほかに、教える際の手本として描いたとみられる墨絵の騎馬武者像や、女びなや男びなの作品もあるとい

「架空の劇団」(盛岡)28日から公演



「生還SEIKAN」の公演に向けて稽古する出演者

石川啄木から考えた「盛岡の短歌碑に題した話題提供。岡村松(1861) 九螺さん 第28回ウッ人の九螺ささらさんの

暴虎の牙

柚月 裕子 画/北村 公司

第十四章(八)

沖は隠れ家に、三島と元、信用できる呉寅会(ごてんかい)の初期メンバー三人を呼びつけた。

この頃、沖は真紀のアパートから塙(はな)を移した。自分が出入りしているのは、真紀を巻き添えにする危険がある。そう考え、広島市郊外の空き家に布団を持ち込み、そこをアジトにした。

隠れ家にメンバーが集まると、沖は笹貫を潰す計画を周到に練った。

事務所を襲撃をかけたところで、笹貫がその場にいるとは限らない。第一、笹貫の事務所周辺には監視カメラが何台も設置され、ドアには厚い鉄板が嵌め込まれている。厳重な監視と防御を掻き潜り、首を取れる可能性は百にひとつだ。

笹貫の住居を襲うことも考えたが、女子供を巻き添



えにする可能性がある。

殺るなら、車だ。林の情報から、車体と窓ガラスには特注の防弾仕様がなされていることはわかってた。マシンガンを連射したところで、確実に仕留められるかどうか、不安が残る。車に乗り降りするところを狙うのが、もっとも成功の確率が高い。沖はそう判断した。

笹貫は家でも事務所でも、車庫で降りしている。家には家族がいるし、事務所は鉄壁の警備だ。狙うすれば、それ以外の場所しかない。

土留めるとすれば...

文化